現場ルポ

岡田精工株式会社、株式会社夢実耕望

＜出席者＞（所属役職は収録時）
岡田清 氏（岡田精工㈱/㈱夢実耕望 代表取締役）
久保田史 氏（㈱夢実耕望 取締役社長）
＜編集委員＞
加納純也、横山裕志

創業の経緯/和菓子屋から粉体技術へ

加納：本日は、よろしくお願いいたします。ではまず、会社の沿革からご紹介いただけますでしょうか。

岡田清 社長

岡田：もともと、私の祖父、岡田久吉が、当時、木村機械という単発打錠機のみを製造販売していた会社の営業部長から独立して、1963年に創業したのがはじまりです。今や、菊水（製作所）さんと畑（鐵工所）さんの歴史から見てもロータリー打錠機が絶対の時代ですが、その50年、60年前はもう、単発打錠機が中心でしたからね。昔は、中外製薬さんとか大正製薬さんとか、エスエス製薬さんとか、どちらかというとOTC（大衆薬）の製薬メーカーさんにこの打錠機を結構使っていただいて、結局、特殊な8ミリのものや7ミリのものを作ったり、Rなんかも違う金型をつくったりするときに、必ず特注の金型、臼杵が必要になるじゃないですか。そういったものを注文取って、仲間の会社さんに作ってもらって、それをデリバリーするのがうちの初代の仕事だったようです。大手製薬会社も一個一個錠剤を作る機械を何十台も並べて量産していた時代もあったのですが、祖父が創業の頃は既にロータリー式高速打錠機に変わっていく時代でした。そんなときに祖父がいた木

村機械では、川口（埼玉）のほうに、もっと大きな100人規模の単発打錠機の工場を作る計画があったらしく、それに唯一反対したのが、うちの祖父だったらしいですよ。時代は変わっていくから、そんな、例えばTDKさんのフェライトなんかも圧縮成形ですが、ああいう業界も全部高速に変わっていくぞっていうことで、単発打錠機の工場なんか作っても、もう間違いなくうまくいかないって反対したらしいんですけど、止めきれなかったらしくて。そんなときに独立したというのがこの会社の歴史のスタートと聞いています。

単発打錠機

加納：そうなのですね。

岡田：祖父は、木村機械では営業のトップをしていましたので、お客さんの動向みたいなものもある程度つかんでいたのではないでしょうか。

加納：なるほど。時代の流れと、方向性が違うことを感じられたのですね。

岡田：そうですね。子ども心に、父からよく聞かされていた話ですが。間違っていましたらごめんなさい。

創業当初の社屋

会社は、東京の世田谷区、当時の烏山（区画整理により現在は、南烏山）に一軒家の事務所兼工場から始まりました。本当にバラックみたいなところですよね（笑）。この目の前の道路が国道20号線、甲州街道で、東京オリンピックのときに、アベベ選手が出ていたマラソンのコースだったんですけど、その頃道路幅拡充で国に取られちゃったらしくて、40坪ぐらいの三角形になっちゃってて中途半端なところなんですが、平成元年に壊して、うちの父の代のときに今のビルに建て替えまして、東京の本社は、今日に至ってます。

東京本社

加納：その後、お父様が継がれて、新しいことを始められたようですね。

岡田：はい、はじめはやはり金型や杵臼を扱う商社機能のようなことからスタートしましたが、1965年に私の父の耕一が入社しまして、打錠の前工程である粉末の混合・造粒・コーティングなど錠剤になるまでのプロセス全体をやらないとビジネスは広がらないということで新しい機械を次々とつくっていきました。ですので、いまだに混合造粒機やブレンダー・ミキサーなどは私どもの主力製品となっています。スピラコータは、流動層が粉じん爆発の安全性の問題で騒がれていた当時に、アルコールや有機溶媒を吹くなんていうのはとんでもないという中、杏林製薬さんが開発中の腸溶性フィルムコーティング製剤のために、うちの父が安全を最優先した流動層造粒機を共同で作ることになったんですよ。要は、問題となるバグフィルターを外して、サイクロンをつ

けてその回収品を循環させて溶媒だけを外に逃がしていこうということで、日本を始め、米独などに世界特許を取った機械なんですよね。

転動流動層コーティング造粒装置スピラコータ
テクニカルセンター見学

横山：お父様は、もともと機械専門の方だったのですか？

岡田：いえいえ、父はもともと池袋駅近く、親戚の和菓子屋で働いていました。

加納：え？和菓子屋さんですか？

岡田：ええ、あんこを練ったりしていました。親戚の和菓子屋だったのですが、ちょっとしたことで大喧嘩があったようで、父がそこを飛び出したそうです。そうこうしていて、行くところがなくて（多分・笑）、祖父の会社、ここ岡田精工に来たのは父が30歳過ぎくらいの頃ですね。

加納：それは、まったくの異業種ですね。

岡田：実は和菓子って、造粒の技術が満載なんですよ。

加納：へえ、そうなんですね。だから、そのお父様が造粒などの部分をはじめられたのですね。

岡田：父は、粉をさわる手の感覚というのが、良かったんですかね。職人気質といいますか…。父は、ものづくりはするのですが、営業面は義理の弟に任せていました。もともとお客様と接することが好きだった祖父は同じく人付き合いの良い僕を（自分でいうのもなんですが）20代後半くらいの時からいろいろな会合に連れて行きました。

横山：隔世遺伝ですね。お聞きすると、岡田社長は新聞社ご出身とお伺いしましたが。

岡田：ええそうです、サンケイスポーツにいました。ちょうど相撲の小錦が幕ノ内デビューしたころの話ですよ。ボクシングだと渡嘉敷勝男。ゴルフは倉本昌弘、湯原信光、羽川豊の日本大学三羽ガラスの頃ですね。ジャンボ尾崎さんの千葉の家にも何度か遊びに行きました。遊びとは本当は嘘でジャンボ、ジェットさんが新人記者をいたぶるのが主たる目的でしたが（笑）。三男のジョーこと、尾崎直道さんだけは、記者いびりには目もくれず、黙々とトレーニングしていましたね。昨日のことのように覚えています。この年、直道さんは賞金王になったと記憶しています。みんな仕事でお世話になりましたよ。

加納：懐かしいですね。有名なスポーツ選手ばかりですね。

岡田：ええ、ちょうど僕が入社した年にフジサンケイ・クラシックでその湯原氏が優勝したんですよ。そのとき、彼の実家の久我山まで取材に行きましたよ。お母様と抱き合って喜ぶ写真が翌日の朝刊一面を飾りました。

横山：そうだったんですね。でもそのあと、この会社に入られたのですね。

岡田：そうですね。先ほどもいいましたが、父は営業よりものづくりなので、周りがそう、うちの社員たちが、休日（水曜休みでした）僕を飲みに誘うんですよ。「お父さんは粉いじりばかりしていて、外へ出ていく人間がいないとまずいんじゃないか」ってね。そんな時に僕もちょっとした事件で、当時のデスクと喧嘩して、「辞めてやる！」といったら引っ込めなくなって（笑）。気が付いたら、この会社を継いでいたという感じです。

加納：お父様と同じですね。

岡田：そうですね…。意外と変なところが短気なのかな…。

一同：（笑）

横山：社長に就任されたのはいつですか？

岡田：平成9（1997）年です。37歳のときでした。とにかく父は外に出ないものですから、学会や会合、とにかく外には私が出てましたので、社長就任は、早いほうが良いということだったと思います。

横山：そして、名城大学薬学部にも研究員で行か

れているのですよね？

岡田：はい、この年ですね。社長就任の年です。名城大学・薬品物理化学研究室の砂田先生に声をかけていただきました。そもそも私は法学部で全く機械とは縁がなかったのですが、粉体の研究などもさせていただきました。また、となりの製剤学教室の檀上先生のところでも一緒に研究をさせていただきました。ちょうど手製の顆粒の硬さを計測する装置があるから、それをスタンダードなものにして、ビジネス展開できるんじゃないかっていうことで。それが最初の成果でしたね。標準処方研究会（現 標準処方研究フォーラム）で折しも造粒方法の違いによる粒強度の評価を各社で実施するタイミングで、すごく売れました。

粒子硬度測定装置グラノ

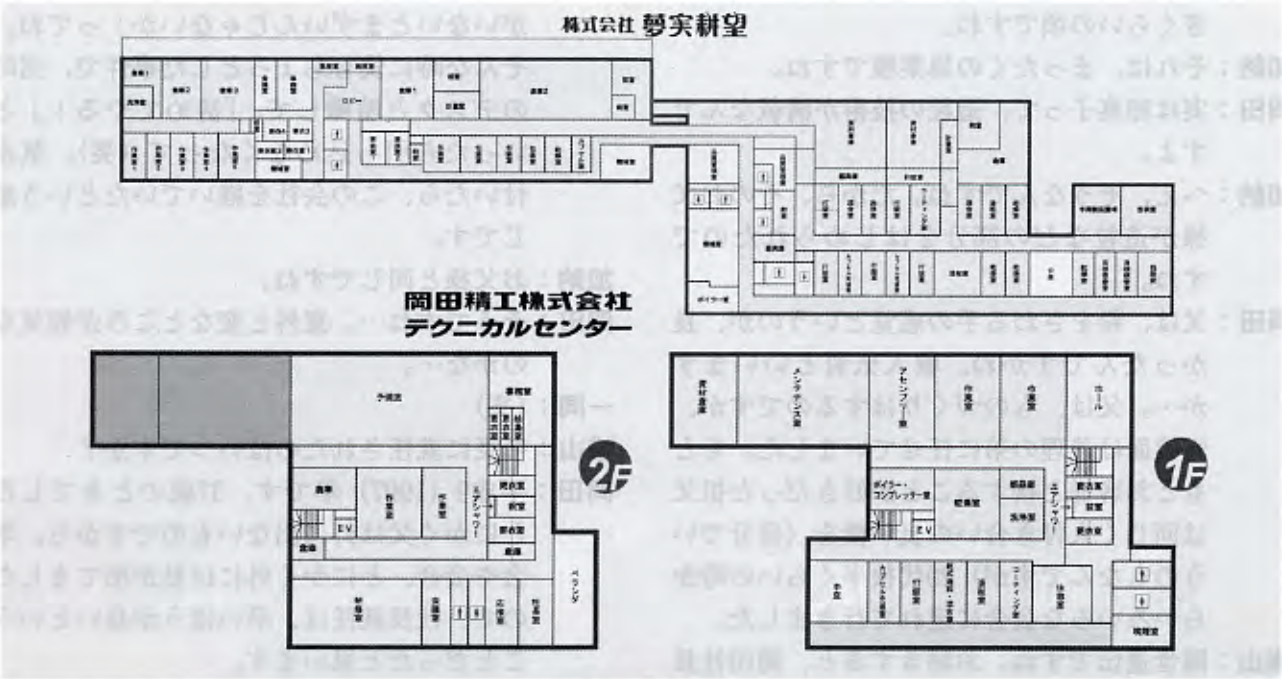
横山：それは、うらやましいですね。そして、今日お邪魔しています場所は、いつごろからですか？

岡田：1999年にここ岩手県・二戸に健康食品受託製造の会社「夢実耕望（ゆめみこうぼう）」を創業しました。県北の生漆、葉タバコくらいしか産業のない町への、無謀ともいえる企業立地でした。今、顧みると若気の至りでしょうか（笑）。しかし、時代のニーズにもマッチし、人も育っていきましたから思い切って親会社の岡田精工も本社から広い場所へということで、2005年には、その隣接に岡田精工テクニカルセンターを竣工しました。そして、しばらく拠点を岩手にしていたのですが、やはり交通の便などもあり、東京本社も2014年5月リニューアルしまして、本社1階に「未来望（みらぼ）MILABO」という名前のラボを作り、現在は東京と岩手の二拠点を中心としています（仙台にも事業所あり）。

会社理念・経営の特徴/お客様・社員・地域と一体化したユニークな社風

横山：清社長になられてから、どんどん新しい機械を開発されていますね。

岡田：そうですね。たくさんのご縁で人との交流の中で、お客様のニーズなどストレートに聞いて、いろいろ作っては結構失敗もして



夢実耕望　施設案内図

いますよ（笑）。
でも、とにかくお客さんと膝を交えて会話する、酒を飲みながら本音を語り合う、いろんな学会に参加して情報を得る…ということから、新しい開発の第一歩としています。そして、大手が手を出さないようなものでも取り組んでいくというところですかね。校正のできるロードセルを採用した錠剤硬度計はうちが日本で一番最初に作った会社です。混合造粒機などは、調味料の会社で特に躍進する東南アジアの会社を始め、海外市場が非常に大きくなっています。

岡田：中には、この「タブフレックス」という機械は、ある研究所の方と「こういう機械がつくりたい」ということで、つくった機械なんですけれど、もう10年になりますが、年に2台とか3台とか出ていくっていう具合のものもありますよ。でも、作りたいと求められれば、一緒に取り組み作っていくというスタンスは変わりません。

横山：主な開発は、どちらでされているのですか？

岡田：今は、東京の本社です。1階にある「未来望」で実験と同時に開発もおこなっています。岩手の工場をつくったときに本社1階はテナント貸しをしていたんですけどね。さすがに皆さんに毎回毎回、岩手まで来ていただくのも不便かなと思いまして。東京の薬剤系大学教授からも「学生の交通費が掛かり過ぎるよ！」と悲鳴も上がって。錠剤硬度計など小さな機械はそちらに置いています。グランドピアノとかも置いてラウンジみたいに改造してしまいました。ワインセラーも設備してかなり渋いワインも飲めますよ！もちろん、ビールも。

横山：（写真を見て）グランドピアノ？楽器屋さんみたいですね。

東京本社　未来望

岡田：ええ。お客さんには、実験をしていただくのにのんびりとリラックスしていただこうと思いまして。実は、妹が音楽大学出身でピアノの先生なんですよ。タイミングよく本社に居ればピアノを弾かせて皆さんに聴いていただいてっていう空間を作っちゃいました。お客さんには東京でも岩手でもお好きなところを選択してお越しいただけるようにしています。

横山：ぜひ一度、東京の本社にもお邪魔したいと思います。
さて、社会貢献や地域貢献にも積極的に取り組まれていると伺いましたが。

岡田：ええ、そうなんです。これは、この地元の久保田（夢実耕望社長）よりお話します。

久保田　夢実耕望社長

久保田：はい。地域貢献としましては、地元で開催されるお祭りはもちろんですが、仙台事業所のある、宮城県黒川郡で開催される産業まつり、稲庭高原祭りという山開きなどには、岡田精工グループほぼ全員総出で参加します。総勢150人くらいですね。あと、現在は、休部状態ですが、実業団の相撲部もありました。過去には、東日本の2部で優勝したこともあります。

横山：それは、すごいですね。

加納：ホノルルマラソン参加のスポンサーもされているとか？

久保田：ええ。先ほどお話しました稲庭高原祭り（山開き）で、5年くらい前まで、マラソン大会がありました。そのスポンサーをしていました。男子と女子、それぞれの優勝者をホノルルマラソンにエントリーさせて、費用は当社が負担するということをしていました。

横山：太っ腹ですね。

岡田：お金もないのに次から次へとそんなことをするから、銀行に怒られてるんです…(笑)。保育園を作った時から、銀行さんには怒られっぱなしですよ。

加納：え？保育園ですか？

久保田：はい、事業所内託児所ですね。「夢実る保育園」を運営しています。

岡田：優れた人材でも育児のために働けなくなるというような問題を回避するため、働きやすい環境を作っています。岩手県では、こういった事業所内託児所というのが初めてだったんで、視察とかも多かったですね。講演も何度もノーギャラで頼まれました(笑)。徳島からも呼ばれましたよ。東京の本社にも一時期、設置を計画したのですが、ほんの少し、2m²くらい面積が足りない、最寄り駅から徒歩5分以内でない（わが社は徒歩6分）ということで認可が下りなかった。何度も都に掛け合ったんですけどね。提供するともいったのに…。都の職員がちまちま電卓たたいて、面積が足りないと。こんなことだから待機児童の問題もなかなか改善できないんですよ。

横山：ほんとにそうですね。舛添都知事（当時）は、広い風呂に入るために公用車で毎週末に湯河原の別荘に行って、ファーストクラスの海外視察と国内も美術館巡りばかりで公約の保育園には一度も行ってなかったりしてるのですから仕方ないですね。
あと、岡田精工さんは、環境への配慮もされていますね。

岡田：そうですね。ここ岩手の地域柄というのもありますが、とにかく空気・土などを汚さないようにというところでは、特に力を入れていますね。ここから青森に向かう県境田子町は産廃不法投棄問題、回収整備作業で散々な思いをしているのも目の当たりにしていますから。

夢実る保育園　先生・園児らと

久保田：5Sスローガン（整理、整頓、清掃、清潔、躾）というのを毎朝、社員全員で唱和しています。ただ、ここは空調関係の負荷が少なく、夏はほとんどクーラーが要らないのです。そして、給気する空気がきれいなので、フィルターも傷まない。このあたりが環境への配慮につながりますかね。

横山：その他、経営の特徴として、厚生面や女性の活躍推進などに取り組まれている中、育児施設を設けているお話もありましたが、女性と男性の社員さんの割合はどのくらいですか？

岡田：約65パーセントが女性ですよ！

横山：65パーセントが女性？

岡田：ええ、グループ全体ですね。本来ですと、ご存知のとおり、機械屋の一環なので、本当は省力化してコストを抑えて売り上げを作らなければならないというのが経営者としての仕事なんですけれど。ただ弊社では、例えば錠剤の検査とかカプセルの検査とかはすべて「人の目」なんですよ。ですから余計に女性が多いんですね。包装作業や検査・検品作業はやっぱり女性のほうが断然能力がありますので。

横山：やはり女性のほうがそういう面には、特に優れているのですね。

岡田：ええ、そうなんですよ。本来であれば画像処理技術を使った自動検査機を使ってしまえば…、初期の設備投資に5,000万円などをかけてしまえば、あっという間に1時間で20万個とかを見ることができます。そうなれば検査員が要らなくなってしまいますが、どうしても目視でないとダメな部分もありますので、女性が多くなっています。

横山：最近、政府も推進している女性管理職を増やすことにも積極的に取り組まれているようですが、人数など教えていただけますか？

岡田：ええ、それはもう積極的に。現在、取締役に1名。部長と課長で4名います。創業当時…あ、夢実耕望の創業ですね。その当時に入社した女性が2名部長になっています。

横山：その他、福利厚生の面では、社員旅行などもみなさんで行かれたりされているんですか？

岡田：ええ、社員旅行はみんな積み立てをしていまして、半分を積み立てで、半分を会社で負担しておこなっています。昨年の秋、10月には熊本に行ってきました。

横山：震災前ですね。

岡田：ええ。そしたら今回の4月の地震だったので、社員の中にはボランティアに行きたいという者もいまして、行ってきましたね。車3台に救援物資を満載して行きました。

久保田：16トン大型トラック1台とあとはハイエース、キャラバン2台でした。

加納：それは大変でしたね。何名で行かれたのですか？

岡田：岩手からと途中合流して仙台から合わせて7名でした。片道3日かけて行きましたよ。実は私の長男坊が熊本の果実堂という会社（ベビーリーフの生産・販売）に5年程勤めておりまして嫁もその熊本なんで。その果実堂がある場所も今回の地震では甚大な被害を受けたところでした。そんなこともあり、ゴールデンウィーク10日間はフルにボランティア活動をしてましたよ。

横山：社員旅行からボランティアにつながるとは、みなさんの行動は、すばらしいですね。

岡田：東日本大震災の時には、熊本から支援してもらいましたから正に恩返しです。

注力している装置（一押し商品）/医薬・食品向けが主力

横山：（カタログを見ながら）それにしても、たくさん商品がありますね。

岡田：商品ラインナップは…。そうですね。ありますね、でもろくに年に1台も売れないようなものもあるんですよ（笑）。

横山：中でも注力している商品とか、一押し商品などはありますか？

岡田：まず、こちらが「スピラコータ」というコーティング装置です。先ほどもお話しましたが、杏林製薬さんと1974年に1号機を開発してから、一貫しての弊社のメイン製品です。

あとは、台数が圧倒的に出ているのは、錠剤の硬度計「グラノ」です。最近、バージョンアップしてさらに低荷重・小粒子の測定も正確に行えるようにした「ニューグラノ」を新製品として出しました。また、新型のスピードチェッカーは、錠剤をセットするだけで重量・硬度・厚みを自動測定するセミオートタイプの複合測定機で反響をいただいています。

粒子硬度測定装置　ニューグラノ

ニュースピードチェッカー　テクニカルセンター見学

「ニュースピードミル」と、「ニュースピードニーダー」は、創業当初から数千台の販売実績を誇っています。今は、東南アジアや南米を中心にまさに飛躍中の国々に毎年大型スケールで設備が輸出されていますよ。

横山：海外にまで、幅広く展開されていますね。ところで、機械を納入されているユーザーの業種などは、どのようなところが多いですか？

岡田：そうですね。やっぱり製薬・食品業界が多いですね。全体の約7割といったところでしょうか。残りがケミカル系かな。

粉体での苦労/やはり、魔物！

横山：いろいろと粉の機械を扱われてきた中で、粉に困らされた経験などをお聞かせいただけますでしょうか。

岡田：いやー、ハンドリングが簡単な粉って、今までお目にかかったことがないですね。加納先生、ホソカワミクロン・横山さんもよく御存知と思いますが、いつも厳しいものばかりですよ。

加納：トラブルだらけですよね。

加納純也 氏

岡田：本当に毎日がトラブルなんで、いかがなものかと…。日々、お客さんの原料をお預かりして実験をしますが、うちは実際に工場を稼働させながら動くラボみたいなところがあるので、毎日のように苦労しています。本当に粉は魔物と思います。この前のはこうだけど、今回のはあれ？っていう、魔性の粉ですよ。

横山：そうですね、ロットによっても違ってきますからね。

岡田：まだ、医薬品の場合は完全にバリデートされて、科学的に作っていますからさほど大きな違いはありませんが、食品の場合はそうはいかない。特に我々が預かる原料は、色も違ったり、おいこれ同じものか？っていうのがあります。だから、このまま作って納品したら絶対クレームが来るんじゃないかって日々悩みますね。

今後の取り組み/農業・健康食品ビジネスへの展開

横山：先ほどからも新たな取り組みについてお伺いしましたけれど、改めて、今後の取り組みについてお伺いできますか。

岡田：今は、7割くらいが医薬や食品の機械です。ご多分に漏れず、岡田精工のほうも今ではジェネリックメーカーさんの設備では国内外問わず結構引き合いをいただき、実際に仕事が動いています。でも5年ぐらい続いているのでいずれ設備投資も一巡すると思われますので、いつまでも医薬品業界ばかり追いかけてもビジネスは厳しいと考えています。ですので、農業の取り組みですとか健康食品事業部の夢実耕望とのコラボレーションで、少しでもリスクを分散していくような運営を考えています。もちろん、今まで通り学会などにも積極的に参加して、新しいテーマを一緒に取り組ませていただきたいと思います。実際に今、一つ二つ新しい装置の取り組みなども行っています。

横山：農業とは、具体的にどのような？

岡田：長男が熊本で農業の仕事をやってきたというのも一つのきっかけですね。岡田・夢実グループとして、農業生産法人の設立につながりまして、まずはベビーリーフをはじめました。

ここ（二戸）でやっていますし、大きなところでいえば、宮城県黒川郡大郷（おおさと）・大衡（おおひら）の圃場（ほじょう）ですね。

横山：ベビーリーフ。スーパーでよく売ってるやつですね。ちっちゃい葉っぱの。

岡田：そうです。葉っぱの赤ちゃんです。水菜とかルッコラとか、7種類くらいのミックスです。仙台の宮城生協へは全部うちの栽培したのが出ています。あと、秋田、福島、宮城など東北はほとんどうちのですね。我が家もそうですけど、子供たちが巣立ったりして、家族が少なくなるとキャベツ一玉買っても余っちゃう。ベビーリーフの場合は少量の使い切りで100円程度で買えるもんですから、最近はスーパーやデパート、生協さんの売り上げも伸びてるんですよね。

横山：それは、儲かりますね⁉（笑）

岡田：少しは利益は取れるようになりました(笑)。ただ、このノウハウは最初は熊本のパイオニアの会社が来て、まあうちの長男坊も来てやってるんですよ。でも熊本だと今1年で14毛作とかやってますよ。

横山：ええ？14毛作？

岡田：これはもう、農業というより、工業です。工場ノウハウの塊ですよ。すでにトヨタやカゴメなど大手はみんな資金をもって参入してきています。だから、うちもこの熊本の「果実堂」と資本出資して農業生産法人を作りました。ややこしい名前ですが、「夢実堂（ゆめみどう）」という社名です。果実堂では生産計画、プロセス自体がノウハウになっていますから、海外などにもデータベースを販売しています。それをビジネスにするんですね。なかなか凄いものです。当社、ここ岩手でも7毛作くらいしています。

横山：年に7回も作るのですね。

岡田：ええ。でもこのベビーリーフなんかもすべてがタイムオンデリバリーで供給できるわけではないので、過剰になったときは刈り取り、うちの工場（夢実耕望）で乾燥させて、粉砕して、ベビーリーフタブレットみたいなものを作るといった具合に、そういうビジネス展開もできるんじゃないかなというような取り組みで進めています。

加納：なるほど。機械から健康食品、農業まで幅広い事業展開ですね。

技術の伝承/教えるには、自ら学び提供する

横山：そのようなユニークな技術ですが、その伝承方法については、どうでしょうか？

岡田：なかなか難しい質問ですね。製剤技術の伝承という意味では、製剤技術伝承実習講習会（日本薬剤学会主催）には、うちも社員2人を参加させて、教える立場と聞く立場のそれぞれを体験させてもらっています。後ほど見学していただきますが、幸いうちにはグループの健康食品の工場で実際に粉を触って、ものを作るプロセスを持っていますから、そこで実際に触らせて教えるというのが現状ですね。新しく入ってくる子たちには、もう理論ではなく、やっぱり実際に粉を触って、こういうものなんだ、錠剤ってこういうものなんだっていうのが一番早いかな。

加納：そうですね。本を読んでもなかなか理解できないですからね。

横山：就職前の職場体験などもされるんですか？

岡田：ええ、そうですね。中学生には見学、高校生には職場体験を実施しています。毎年やっています。すべてガラス張りにした見学通路もつくっています。あとは、より興味を持った場合は、クリーンルームウェアに着替えていただければ、中にも入ってもらい実際の装置を眼の前で見ていただけるようにしています。

横山：すばらしいですね。

横山裕志 氏

協会への期待/地域活性・人材育成

横山：最後に協会や大学に期待されることなどございましたら、お願いします。

岡田：そうですね。今一番悩んでいるのは、求人ですかね。なかなか場所的なこともあって、人が、失礼ながら高学歴な人がなかなか来ない。みな、都心の大手企業に行ってしまう。なのでぜひ、東北大学の学生さんなんかに来ていただけるといいですね。

加納：それはもう、大学ではいろんな会社の方々と学生さんとの接点というのも企画していますので、ぜひご参加ください。その時は新しい実験機とか作っていただけますかね？

岡田：そうですね、それは是非、協力させていただきたいです。ありがとうございます。

加納：本日は、お忙しい中たくさんのお話をお伺いさせていただき、ありがとうございました。

岡田精工の皆さんと

収 録 日：2016年5月13日（金）
場　　所：岡田精工㈱ テクニカルセンター、
㈱夢実耕望
〒028－6902
岩手県二戸市浄法寺町夢実
会社プロフィール：
岡田精工㈱
創　業：昭和38（1963）年8月1日
資本金：6,000万円
従業員：18名
㈱夢実耕望
設　立：平成13（2001）年3月
資本金：6,600万円
従業員：121名
編集担当：横山裕志（ホソカワミクロン㈱）